

【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力（一）

— 基礎編・珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙 —

鈴木健司

私は、「宮沢賢治文学における地学的想像力」のテーマのもと、基本篇・応用篇・発展篇の各段階における論文を積み重ねることにより、賢治文学の独自性に迫りたいとの構想を有している。基本篇では地学的想像力にフィードワークの視点から迫り、応用篇では基本篇での成果を作品分析へと応用し、発展篇では作品におけるへ地学的想像力へをへ仏教的想像力との連関性において包括的に考察していきたいと考えている。

本稿「珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙」は、基礎篇における一章をなす予定のものである。一として、大正七年十二月父政次郎宛書簡に記された「岩谷堂産・木化蛋白石」「繫温泉産・瑪瑙」に関する調査報告。二として、賢治との取引を約束した東京の宝石店、「水晶堂」及び「金石舎」に関する調査報告。三として、金石舎旧蔵の木化蛋白石に関する科学的分析結果の報告。四として、短歌「明治四十二年四月より」に記された「鬼越やま」の「瑪瑙」に関する調査報告ならびに考察、「繫温泉産・瑪瑙」（前出書簡）に関する調査報告をする。「岩谷堂産・木化蛋白石」に関しては、別稿「珪化木（Ⅱ）」（言語と文化）第20号、文教大学言語文化研究所、平20・3）でさらに詳しく扱う予定である。

キーワード…宮沢賢治、木化蛋白石、瑪瑙、水晶堂、金石舎

一 大正七年十二月父政次郎宛書簡

次に引用するのは、大正七年、妹とし子の看病のため在京中であった賢治が、父政次郎に宛てた書簡の一部である。

尚当地滞在中私も兼て望み候通りの職業充分に見込相付き候。蛋白石、瑪瑙等は小川町水晶堂、金石舎共に買ひ申すべき由岩谷堂産蛋白石を印材用として後に見本送附すべき由約束致し置候

(十二月三十日)

小包は最早御発送相成り候や 若し未だならばその節

岩谷堂 木化蛋白石 二箇
繫温泉 瑪瑙 数箇

(大なるものは二枚戸棚又は床の間、／小なるものは店の二階のボール箱)を御入れ下され度右は水晶堂に持参仕るべく候

(十二月三十一日)

まず、書簡中の「水晶堂」と「金石舎」について触れておきたい。水晶堂は神田区小川町(現千代田区神田小川町)二丁目、金石舎は同一丁目にあった宝石店である。水晶堂は明治二十二年の創業、金石舎は明治

十七年の創業とされる。

父に発送を依頼した「木化蛋白石」と「瑪瑙」だが、一月七日父宛の書簡に「小包」の届いた旨の記述があり、おそらくその中に、「木化蛋白石」や「瑪瑙」の入れられていた可能性がある。その場合、賢治は速やかに水晶堂に持参したと考えてよいだろう。問題は、水晶堂に持参した結果どうなったか、ということだ。前出書簡に「水晶堂、金石舎共に買ひ申すべき由」と記されていたように、印材としての商談が成立したのか、さらには、金石舎の方へも資料は送られたのか、知りたいことは次々と湧いてくる。

しかし、実のところ、十二月三十一日の書簡以降、われわれはまったく「木化蛋白石」と「瑪瑙」の話題を書簡に見出すことができなくなっている。もし、計画が予定通り賢治にとって好ましい方向で進んでいったとするならば、その後の書簡に何らか触れられていてもよいのではないか。それが無いということは、計画は頓挫してしまったとも考えられるだろう。一月七日の書簡に記される「小包」は、本来的には入院中の子のためのものであり、賢治の父がその小包に息

子の希望通り「木化蛋白石」と「瑪瑙」を入れたかどうか、確認はできない。逆に、父の怒りに触れ、送ってもらえなかったことも十分に想像される。

二 水晶堂

創業は明治二十二年、水晶堂五味商店として神田今川小路にて開業。初代店主は山梨出身の五味道三という人で、甲府師範学校の校長をやめ、この道に入ったという。その後店を神田小川町二丁目二番地に移したとのこと（明治何年かは不明）。水晶堂はその名のとおり、水晶を主力の商品とした店で、甲州産水晶の印材、細工物（水晶玉、干支物、仏像、掛け軸の棒先など）を扱っていた。黄水晶、紫水晶、煙水晶なども扱い、水晶以外にも瑪瑙の乳鉢やベッコウの細工物などを扱った。鉱物としてでなく加工した製品として店においておいた点、鉱物を素材のまま店においておいた金石舎との違いがあるとのことである。明治三十六年に開かれた東京勸業博覧会（徳川慶喜も会場に足を運んだ）では、水晶堂も売店を出店している（写真1）。

五味道三は先見の明のあった人物で、帝国ホテルをはじめ国内に多くの支店を開き、サンフランシスコにも支店を出した。また、長男の五味行長らを中国に派遣しヒスイの現地購入を試みたり、大玉の水晶を作成するため、ブラジルに買い付けに行かせてもいる。その辺の事情は、大森文衛著『水晶ものがたり』（昭46・11、株式会社大森水晶）に触れられているので、次に引用、紹介する。

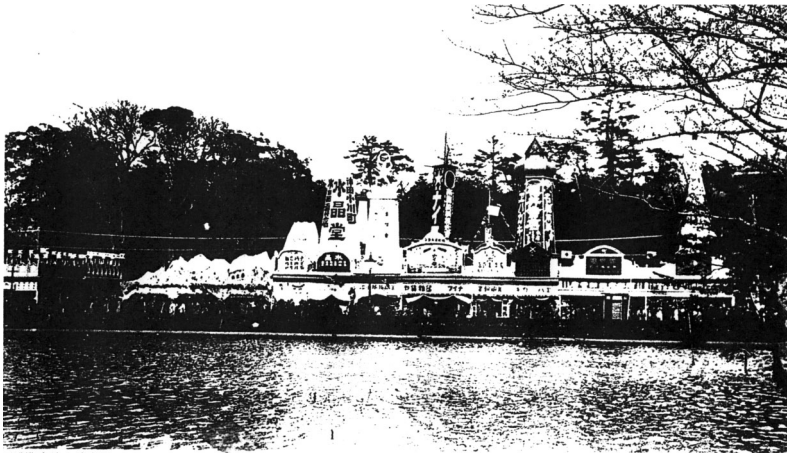
「五味水晶堂が大玉用水晶輸入」

土屋勝次が第一回の渡航をした大正十一年に、土屋より少し先に、東京神田区小川町の水晶堂・五味道三は、社員を北米廻りでブラジルへ派遣した。リオデジャネイロ市で、一個十キロ、二十キロの大型水晶を買い取り、輸入してきた。この水晶も業者に公開されたが、いずれも水晶大玉がとれる原石ばかりで、業界でも見事なその大きさに驚いたものである。

リオデジャネイロ市はゴヤス州の原石、リオグランデ州原石、バイヤ州、ミナソ州などから産出

する原石の集散地であるから、五味水晶堂社員は、直接産出地に行ったものではなく集散地で粒選りのものを買取っただけに、甲府の業者らに水晶に対する眼を開かせた大きな役目をした。

水晶堂の大掛かりな商売の一端を知ることができる。水晶堂は関東大震災（大12・9）と太平洋戦争での東京大空襲（昭20・3）により壊滅的な打撃をうけた。関東大震災での罹災ではすぐに店舗の再建が行われたが（写真2）、太平洋戦争時では、輸入した原材料など貴重なものばかりを移した店舗裏の防空壕が罹災（道路側の防空壕は無事であった）するという不運にあい、それがきっかけで主力商品が変化していったとのことである。現水晶堂当主より、防空壕の罹災で鱈が入り煤のついた水晶（ブラジルからの輸入品）を頂戴した（写真4）。水晶堂は戦前からメガネ用のレンズの製作をおこなっており、さらには、理化学研究所からの依頼による「水晶発振子」の製作なども手がけたという。戦後二十九年頃からメガネ専門店になった。現在は、千葉県鎌ヶ谷市に移転し、「水晶堂 せがわ」



河博覧会池之端売店

写真1（提供：水晶堂せがわ）



写真2 (提供：水晶堂せがわ)

としてメガネ店を営んでいる。当主は瀬川博氏で、昭和十一年生まれ、昭和二十七年から「水晶堂五味商店」に勤められていた方である。

賢治が訪ねた大正七、八年ころは初代店主の五味道三が元気で、二代目の行長もいたが、初代が話し相手をした可能性が高いということである。水晶堂は印材を確かに扱っており、印材という点で当主は興味を示したかもしれないが、賢治が話題にした「木化蛋白石」にどの程度興味をもったかは疑問だそうである。ただ、もと教師で、しかも視野の広い人だったので、賢治の申し出に対し、教育的配慮から引取りを口にしたかもしれないということである。(情報・水晶堂現当主瀬川博氏よりの聞き書き、及び、当主より寄贈された資料)

三 金石舎

金石舎に関しては、すでに住田美知子により調査報告がなされていて、参考になる(「賢治研究」第83号、平12)。もともと、東京賢治研究会による『賢治ゆか

りの東京』を訪ねるバスハイク（平成10・8）の企画での訪問が端緒となっている。実は私も金石舎訪問に参加してはいたのだが、当時は私個人の問題意識がそちらに向かつておらず、住田氏の調査報告であらためて事の意義深さを確認した体たらくであった。

本稿では、住田氏の報告と極力重ならない範囲で、その後私が調べることのできた幾つかを報告させていただく。現在、金石舎は、十階建ての「金石舎ビル」十階に、宝石専門店としての事務所を構えるが、一般店舗としての商売は行っていない。

私の記憶では、店舗内には、岩石類が陳列ケースや床の上に置かれており、多少埃をかぶっていて、商品として展示されている感じではなかった。その折、記念に天河石（アマゾナイト）を購入した（写真5）。「空がはれてそのみがかれた天河石の板」（初期短編綴「うろこ雲」と表された石である）。

ビル一階の店舗を閉め、貸店舗として店内整理をするにあたり、宝石を除く、いわば不要品となった鉱物・岩石のすべてがノーベル社に引き取られることになった。ノーベル社は教育用の岩石標本を製作する会

社で、社長の土屋氏のお話によると、「急いで運び出さなければならぬ状況で、何がどのくらいあったかということとは全く確認をしなかった。ともかくノーベル社の方に移動させるだけで精一杯だった。鉱物・岩石をすべて移動するのに、ライトバンで四〜五回かかった」ということである。土屋氏はその後金石舎から運び込んだものを時間をかけて整理したので、それが金石舎旧蔵品かは確実に分かるとのことである。

金石舎は発展の過程で、組織がさまざま独立し、「キンセキ」（現在は「京セラキンセキ」）なども金石舎の研究部門が発展したものである。金石舎社長の千藤伸一氏（昭和六年一月生まれ）のご厚意により、「社史」の一部と思われるコピーの一部を入手することができた。「社史」の現物にあたるものは千藤社長のもとにも見あたらないそうである。その後「社史」のコピーが、株式会社「キンセキ」の社史『キンセキ物語―水晶と歩んだ50年―』からのものであることが確認でき、私は京セラキンセキ社を訪れ、直接社史を見せていただくことになった。

結果として、肝要な箇所は住田氏の報告ですでに十

分と思われたが、私のテーマである（地学的想像力）の見地から考えた場合、一見無価値なようでもこの機会に紹介しておく意義を感じる記述も少なくなかった。

長い引用となる点お許し願ひ、かつ、ここでは一々の重要性は説明せず、資料紹介にとどめ、後の章で発展させていきたいと考える。

「明治・大正期の金石舎」

この時代は、近代日本の幕開けに当たり、富国強兵のかけ声のもと、資本主義経済の成立が急がれ、政治機構の整備と並行して、そうした近代化の根幹としての教育制度の確立が進められた時代である。文部省では、教育施設の拡充のためにさまざまな施策を遂行したが、その一つに全国の学校への理科標本の配布があった。

金石舎の創業は、このうちの鉱物標本の製作を文部省から任されたことにはじまる。文部省としても、多岐にわたる雑務を処理しきれず、民間への委託を図ったものであろうが、前にも記したように鉱物識者でもあり、鉱物産地の開拓者として、

鉱物学界にも貢献度の高い高木勘兵衛を店主とする金石舎は、鉱物標本の製作を委託するのは恰好の所であつたに違いない。このとき金石舎に引き渡された材料は、岩石200種、鉱物200種にのほり、何台もの大八車で小川町の店に運び込まれた。

明治・大正期の金石舎について、具体的なこととはそう多く伝えられていない。ただ標本作りを進めるかたわら、宝飾品の加工にも手を広げ、明治39年の第10回勸業博覧会に、かんざしや髪飾を出品している。

また明治43年には、アメリカから紅亜鉛鉱（zincite）を輸入し、鉱石検波器の研究試料として農商務省の無線電信課に納入したことが伝えられて、加工技術の応用分野を模索していた様子がかがえる。大正期に入ると検波器材料の納入先は、日本無線電信（のち日本無線）、安中電機（のち安立電気）、吉村商会（現在の東洋通信機）などに拡大した。鉱石検波器は現在のダイオードに相当する電子部品だが、簡単に加工した方鉛鉱（galena）などの鉱物と探触針（電極の役目をする

る)を絶縁物の台に取り付けけた小さな容器に収めるだけの工程は、寶石職人にとっては容易な仕事だったようで、やがて金石舎自身も鉱石検波器の製造に取り組み、大正14年(1925)に商品名「キング」および「スター」として販売を開始した。この年、東京、大阪、名古屋でラジオ放送がはじまり、大正15年(1926)には日本放送協会(NHK)が設立され、鉱石ラジオの普及とともに鉱石検波器の需要は急速に拡大した。

この間、寶石店としての業務も順調で、引き続き宮中のご用に恵まれ、大正天皇の即位に当たっては、儀式に使う水晶球の加工を拝命した。作業場の周囲に注連縄(しめなわ)を張り巡らし、作業者は白装束をつけて作業に当たった。

また大正年間には、東京の下町一帯を壊滅させた関東大震災(大正12年)があり、金石舎も店舗を焼失したが、ほどなく再建されて業務を再開した。

資料中に、明治三〇年頃の金石舎の店舗の外観と内



写真3 明治30年頃の金石舎寶石店
右は陳列棚

部を撮った写真があった。店舗外観はすでに、『新校本宮沢賢治全集』（第16巻下「年譜篇」）に収められている。故奥田弘氏が金石舎を訪問（宮沢賢治研究会「賢治ゆかりの東京」）した際、壁にかけてあった額縁に旧店舗の写真のあることに気づいたことがきっかけである。さらに、住田氏の論にも写真版が紹介されている。ただ、店舗内部の陳列棚の写真に関しては、資料として多少なり意義のあるものと考え、店舗外観の写真とともに紹介しておく（写真3）。

（情報・金石舎現当主よりの聞き書き、及び、当主より寄贈された資料（社史部分コピー）。京セラキンセキ社所蔵『キンセキ物語―水晶と歩んだ50年―』、ノーベル社社長土屋氏所有の金石舎旧蔵品）

四 金石舎旧蔵・木化蛋白質

ノーベル社が所有する金石舎旧蔵品のなかに、二本の珪化木がある（写真6・7）。蛋白石化したと思われる箇所もあり、本稿冒頭で紹介した大正七年末の父宛書簡に書かれた「岩谷堂産 木化蛋白質」に当たる

かもしれないと考えた。賢治の訪れた金石舎は、大正一二年の関東大震災で店舗を焼失しており、たとえ賢治が実際金石舎に「岩谷堂産 木化蛋白質」を送っていたとしても、関東大震災の時点で焼け、処分されてしまった可能性が高い。しかし、店舗焼失前に他の岩石・鉱物とともに持ち出されていないとも限らない。もし、ノーベル社所有の金石舎旧蔵品が、賢治の採集した珪化木であるとしたら、貴重な発見であり、かつ賢治の「木化蛋白質」に対する具体的イメージを確認することのできる重要な資料となる。

問題は、金石舎旧蔵の木化蛋白質が賢治ゆかりのものであるかの確認の方法である。状況証拠としては、その可能性は否定されていない。金石舎社長のご記憶では昭和十年以前から陳列ケースにあったということだからである（関東大震災以後に仕入れた可能性は残されるが……）。しかし、状況からだけでは最終的な判断の下しようがないので、科学的に樹種の同定をすることにした。国立科学博物館・地学研究部・生物進化史研究グループの植村和彦氏の助言によれば、珪化木の樹種同定のできる学者は日本に二人しかいないそ

うである。たまたまそのうちの一人、福井県立恐竜博物館の寺田和雄研究員と連絡がとれ、樹種同定の依頼を福井県立恐竜博物館長あてにしたところ、幸いにも館長の決裁があり、金石舎旧蔵の木化蛋白石二本を寺田和雄研究員のもとに送ることになった。もし、金石舎旧蔵の木化蛋白石が賢治ゆかりのものであるなら、岩谷堂産の珪化木（木化蛋白石）が埋もれている、稲瀬火山岩層（新生代・新第三紀・中新統）とよばれる層から産出される植物との共通性が認められなくてはならない。稲瀬火山岩層は約一五〇〇万年に火山活動が活発化した際にできたものである。当時存在していたことが確認されているスギやマツの類、また、ナラやブナの類などと同定されれば、賢治ゆかりのものである可能性は残ることになる。

鑑定結果であるが、賢治ゆかりのものでないことが証明されることとなった。二本の木化蛋白石は同一種のものであり、産地は熱帯地方（たとえば東南アジアなど）で、おそらく海外から取り寄せたものだろうという判断であった。

五 瑪瑙

大正七年末の父宛書簡には、「岩谷堂 木化蛋白石」の他に、「繫温泉 瑪瑙 数箇」とも記されていた。賢治にとって瑪瑙の納入がどのような目的であったのか、書簡から窺い知ることができない。水晶堂に関する調査のなかで「瑪瑙の乳鉢」というものがあった。しかし、乳鉢に加工できるような瑪瑙が繫温泉付近で産出するとは考えられない。当時すでに輸入品として大型で良質の瑪瑙が多く出回っており、可能性があるとすれば、瑪瑙による小物の細工物への利用だが、この可能性もないように思う。繫産の玉髓は、白色半透明で、色彩的にも平凡で素材として魅力あるものとは思われない。また、国内産の場合、瑪瑙といっても実際には玉髓であることがほとんどである。

瑪瑙も玉髓も、成分は同じ石英（珪酸・SiO₂）の微細な結晶の集合体であり、瑪瑙と玉髓との区別をつけずに呼ばれることもある。一般的には、瑪瑙は縞模様のあるのが特徴とされ、玉髓は白色半透明のものとさ

れる。

中等教育用に編集された、明治三五年二月刊行の神保小虎著『普通教育 鉱物界教科書』（初版・開成館）によれば、「瑪瑙は石英の一種にして小刀にても爬くも傷つかず、赤、白の縞ありて頗る美なり、出雲、越中などに産す」とあり、「頗る美」であることが強調されている。この教科書に玉髓の名は見えない。大正一二年一二月（初版・大正一一年一月）に発行された中等教育用の大築伝郎・内山延次郎著『鉱物教科書』（帝國書院）では、「玉髓は石英粒の緻密に集合したるものにして、多くは瘤形の塊をなし、岩石の空隙中に産す。白・灰・黄・褐・緑などの色をなし、半透明・蠟光沢を有す（図入り）。瑪瑙は玉髓とその質略同一にして、赤・褐・白・緑等の諸色が美麗なる縞状または斑紋をなして現はるるものをいふ。（図入り）」（図1・2）と記述されており、玉髓には「Chalcedony」瑪瑙には「Agate」とのルビが付されている。産地として玉髓は常陸玉川・加賀那谷、瑪瑙は出雲玉造がそれぞれ欄外で紹介されている。

明治九年の資料だが、文部省（当時）が日本産鉱物

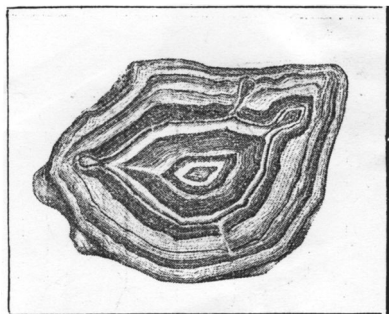
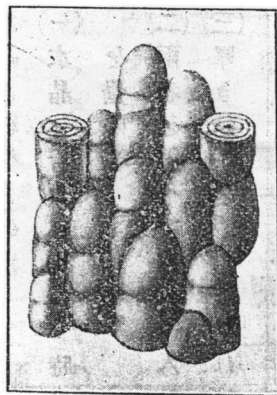


図1



圖解
玉髓

図2

調査の目的で行った各府県ごとの鉱物の産出状況を記した『各府県金石記』（鑑定はナウマン・和田維四郎）には、「岩手県」の項に「燧石」が挙げられており「陸中国岩手郡鶴飼村字鬼越山」と産地が記されている。燧石（火打石）に使われるのは通常玉随である。だがこの『各府県金石記』には、玉髓の名称は見えない。当時燧石は鉱物名として立てられてはいたが、おそらく玉髓もまた燧石と表記されていたと思われる。一方、「瑪瑙石」の産出が記されている県もある。したがって、明治初期には、瑪瑙と燧石とは区別されていたが、燧石と玉髓との区別は明確でなかった可能性がある。

さて、「童話「狼森と笹森、盗人森」に「東の稜はつた燧石の山を越えて、のっしのっしと、この森にかこまれた小さな野原にやってきました」とある。この「燧石の山」とは『各府県金石記』に記された、岩手山麓滝沢村鬼越地区にある燧掘山のことである。

鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ

歌稿〔0・1〕 〔明治四十二年四月より〕

賢治盛岡中学一年の作と推定される短歌である。中学一年の「博物」は（鉱物）を学んでいるので、賢治は「博物」の授業を契機に鉱物採集に出かけた可能性が考えられる。この点に関しては、板谷英紀（『賢治博物誌』、れんが書房新社、昭54・7）や小川達雄（『隣にいた天才 盛岡中学生宮沢賢治』、河出書房新社、平17・5）がすでに指摘している。ただ、瑪瑙と玉髓との区別や「鬼越山」の所在について若干の疑問があるので、ここで具体的に両氏の論に言及しておきたい。

板谷英紀は「瑪瑙は玉髓とごく近い仲間ですので賢治もはじめは瑪瑙とよび、後に鉱物学の知識が豊かになってから玉髓と言いつつようになったものと思われる」と記している。その根拠として「昔の中学校には生徒用の鉱物標本箱が備えてあつてそれで鉱物の名前を教えられたものですが、その標本はたいがい一番が水晶でそれに石英、瑪瑙と続くのが普通でした」と指摘し、玉髓の学習は、その後「種類の多い標本に接した」からではないかと推察している。

「大正四年四月より」の短歌では「玉髓のかけらひろへど山裾の紺におびえてためらふこゝろ」と、瑪瑙ではなく玉髓の名称が用いられていることが踏まえられていることである。二つの短歌はおそらく場面は同じ鬼越である。なぜ賢治はこの短歌の場合、瑪瑙ではなく玉髓としたのか。問題は、板谷が根拠としている岩石標本が、いつ頃のものであるかということにある。板谷は「その標本はたいとい一番が水晶でそれに石英、瑪瑙と続くのが普通でした」と記憶を述べているが、それは賢治在籍当時のものなのか、疑問である。また、中学校（旧制）用のものならば、板谷が記憶する配列と異なっている可能性が高い。残念ながら私の調査した範囲内で年代を確定できる鉱物標本はないが、もし中学校（旧制）用ならば七十〜八十種程度は必要で、明治期か大正期のものと推定される金石舎の七十種の『神保先生著普通教育鉱物界教科書適用 生徒用鉱物界標本』では、一〜四までが水晶類で、五が玉髓、六が瑪瑙となっている。神保先生とは神保小虎（東京帝國大学教授）のことで、賢治盛岡中学在学時に使用していた「博物」の教科書が神保小虎著の『普通教育鉱

物界教科書』（開成館、明治四十年十月・修正七版）であった。

また、先に紹介した神保小虎著の教科書は明治三五年二月の版であり、そこに玉髓の名はなかったが、賢治が使用したのであろう、開成館の神保小虎著、明治四十年十月・修正七版『普通教育鉱物界教科書』（北海道大学図書館所蔵）には、

【三】瑪瑙の一面を磨きたるもの

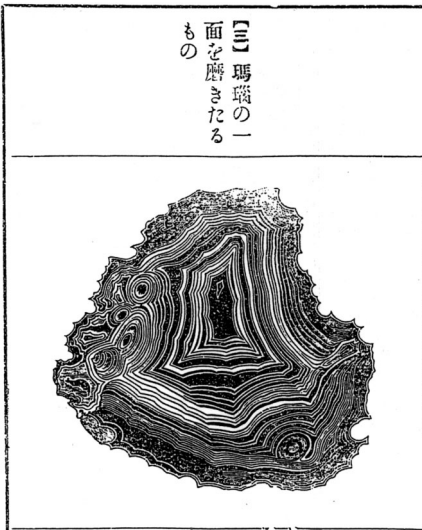


図3

玉髓、瑪瑙。玉髓はその質、密にして、や、透明に、光沢ありて、通常、赤、白、灰などの色を帯び、岩石の割れ目、隙間などに葡萄の如き形となりて出づ。この玉髓の赤、白などの縞を現せるものは、即ち瑪瑙なり。

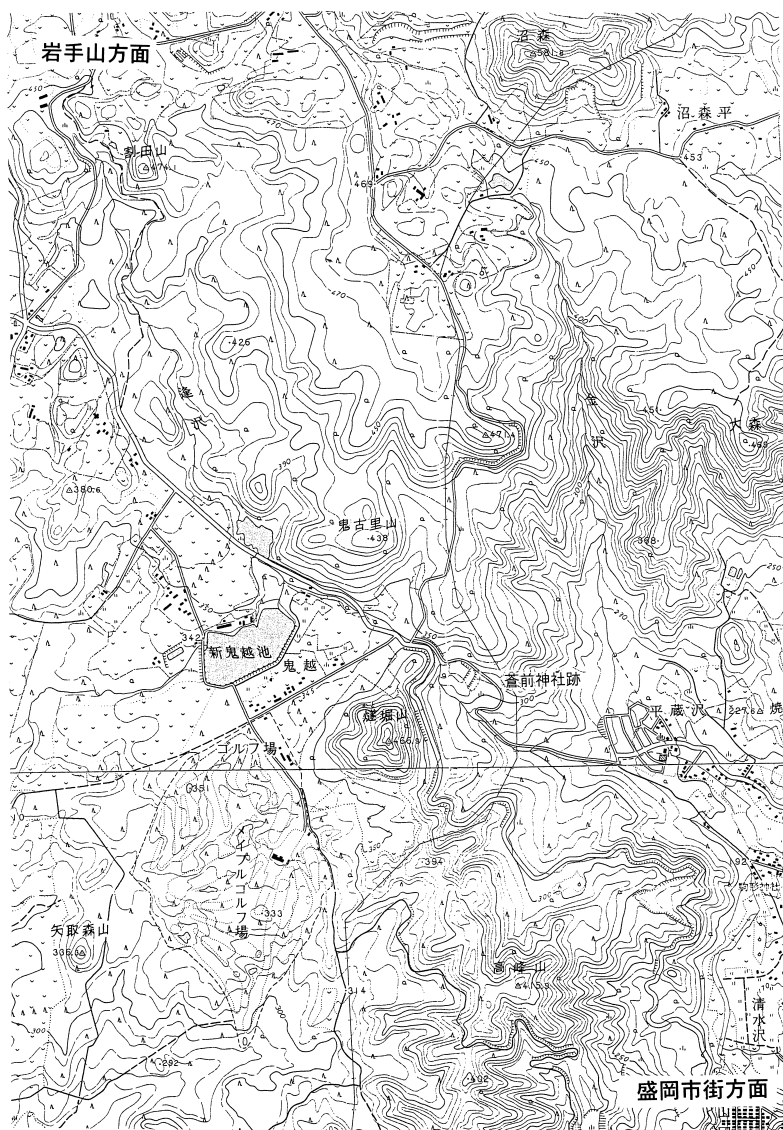
とはっきり記されており、瑪瑙の図も「瑪瑙の一面を磨きたるもの」と注つきで掲載されている(図3)。

板谷氏の記憶する教材用鉱物標本が、一水晶、二石英、三瑪瑙となっていたとしたなら、おそらくそれは、昭和初期の小学校初等科(四、五、六年)用の鉱物標本ではなかったであろうか。四十二種の標本だが、その場合でも、四は玉髓である。したがって、賢治が「瑪瑙のかげら」を採取したとき、玉髓の名を知らなかったと断定することはできないことになる。

明治期に玉髓の名がどれほど学校教育内で定着していたか、それを確定する資料を私は持ち合わせていないが、島津製作所標本部が作成した明治三十六年版目録(小学校用鉱物標本之部)では、玉髓、瑪瑙、燧石などの名が記されている。また、金石社の明治二〇年

に作成した「広告」(早稲田大学図書館所蔵)によれば、「学校用金石標本及岩石標本」として、「金石之部」で三十種、五十種、百種、百二十五種、百六十種、「岩石之部」で四十八種、六十種、百二十種あることが確認できる。おそらくそこには玉髓が含まれていたと推定される。

小川達雄の考察に対する疑問は、「鬼越山」を鬼古里山と捉えている点にある。小川は「鬼越の山とは、その背後に控えた鬼古里山のことである」と断定し、燧掘山に関してはその存在を記すにとどめている。賢治は文語詩「(友だちと鬼越やまに)」で、「友だちと鬼越やまに／赤錆し仏頂石のかげらを／拾ひてあれば／略／」(『校本全集』所収、「新校本全集」では推敲過程との判断から未収録)と記している。この「鬼越やま」は、原稿でははじめ「燧掘やま」と記されていた。私の考えでは、続く「仏頂石のかげら」の表記との関連で推察するなら、「鬼越やま」は、「鬼越」にある「やま」の意であり、賢治には燧掘山がイメージされていたのであり、鬼古里山と断定すべきではないと思われる。



地図1 (国土地理院・五万分の一地形図より)

鬼古里山(438m)と燧掘山(467m)との位置関係をはつきりとさせるため、鬼越地区の地図(国土地理院・地形図より)を付す(地図1)。

確かに、鬼古里山は、江戸時代に「鬼越山」(鬼古里山とも)と表記された事実がある。それゆえ燧掘山とは区別されるとの考えも根拠のあることではあるが、現在(賢治の時代も含め)「鬼越」という地区名や「鬼越坂」(「鬼越峠」という坂名、峠名は存在している)も「鬼越やま」という山名は存在していない。

賢治が「燧掘やま」を「鬼越やま」と書き直した理由には私にとつて定かではないが、古くより「鬼越山蒼前神社」との表記があり、その例に従った可能性も考えられる。どちらにせよ、燧掘山こそが、燧石を産出する山として明治以前より広く知られていた事実を動かすことはできない。賢治が詩にいう「仏頂石のかけら」とは玉髓のことであり、燧掘山から玉髓が燧石として掘り出されていたのである。燧掘山から採掘された燧石は峠道を盛岡城下に向けて運ばれて行った。

したがって、先に紹介した明治九年の『各府県金石記』に表記されていた「鬼越山」を、小川の説にもと

づき鬼古里山であると解釈することは不自然となる。鬼古里山には燧石を採掘した歴史がないからである。

小川の主張する鬼古里山はあくまで「鬼越山」の候補地の一つにとどめるべきと私は考える。燧掘山も「鬼越山」の一つに違いないのだから。

ただ、「経埋ムベキ山」(『雨ニモマケズ手帳』)の一つに「鬼越山」の名がある点、注意しておかなければならない。賢治自身の表記であるだけに、この「鬼越山」が鬼越地区のどの山を指すのか判断がむずかしい。賢治は燧掘山に関しては燧掘山(文語詩「車中」に「稜掘山の巖の稜」とある。「稜」は「燧」のこと)と表記し、鬼古里山と区別していることが明らかなので、「経埋ムベキ山」の「鬼越山」の場合、燧掘山を想定することには無理があるように考えられる。鬼古里山は中腹(鬼越坂途中)に蒼前神社跡(明治四十三年に現在地に移築)があり、チャグチャグ馬コとの関連を考慮すれば、「経埋ムベキ山」の「鬼越山」として賢治が鬼古里山を想定していたとする根拠の一つにはなるだろう。ただ、賢治の用語として「鬼古里山」の表記例が一例もないのはなぜなのか、賢治にとつて、燧

掘山以上に鬼古里山に思い入れがあたかどうかは疑問である。

その意味で、小倉豊文が『雨ニモマケズ手帳』新考（東京創元社、昭53・12）で、「経埋ムベキ山」の「鬼越山」が「鬼古里山」であることを前提に解説していることには、再考の余地が残されていると思われる。「鬼越山」は、現段階では「鬼越」にある（山）以上のものではないと述べておきたい。

小川達雄は次のようにも記している。「わたしはある時、鉱物の専門家・及川昭四郎君先導のもと、鬼越山でこの瑪瑙探しを試みたが、結局発見できたのは瑪瑙以前の玉髓のみであった。実際にはその『かけら』を拾うこともむずかしい」。氏が登った「鬼越山」は、おそらく鬼古里山であるはずだ。地質図上は鬼古里山も燧掘山同様、飯岡層（第三紀）から成るとされるが、玉髓の出る可能性のある飯岡層は、鬼古里山の地表面からはまったく確認することができない。

理由の第一は、地表面が腐植土に厚く覆われており、岩石の露頭を見出すことができない点にある。岩石が採取できなければ玉髓を含むかどうかとも判断のしよう

がない。

理由の第二として、鬼古里山の在る鬼越峠の岩手山側には、過去の岩手山の活動による火山岩屑（第四紀）の流れ山が各所にあり、童話「狼森と笹森、盗人森」に登場する狼森（380m）がそうであるように、鬼古里山もまた岩手山の岩屑なだれによる流れ山の可能性があるのである。土井宣夫「岩手火山山麓の岩屑なだれ堆積物群」（『火山』第36巻第4号、平3）によれば、小岩井岩屑なだれ・大石戸岩屑なだれによる堆積物が、岩手山麓から鬼越峠方面に広範囲に存在し、燧掘山手前でせき止められた形になっている。

このことから、まず、燧掘山は岩手山の岩屑堆積物をかぶっていないことが判断ができる。ただ、岩屑堆積物の一部は峠（約350m）を越え、谷間沿いに下って平地にまで達している点、岩屑なだれのエネルギーの膨大さが想像される。

次に、鬼越峠の岩手山側の場合でも、例外的に、沼森（582m）や鬼古里山は、岩屑なだれ堆積物に覆われていないことが分かる。ただ、鬼古里山でいえば、おそらく中腹程度までは岩屑なだれ堆積物で周囲をす

つまり覆われていると判断できる。おそらく、中腹から山頂にかけて、表土を深く掘り込めば、飯岡層が露出すると予想される。ただし、私が岩石を採取できた範囲、すなわち鬼古里山麓下部では、一、二点の飯岡層からと推定される標本を除いて、すべての岩石が岩屑なだれ堆積物であった。証拠として、岩手山腹の崖崩れ跡から採取した岩石(写真8)と、鬼古里山の東西の山麓斜面から採取した岩石(写真9・10)、燧掘山の母岩と推定される岩石(写真11)を提示する。岩石としては三標本とも輝石安山岩だが、鬼古里山麓(東・西)の輝石安山岩が、飯岡層系列のものでなく岩手山系列のものであることが確認できると思う。

結論として、鬼越峠岩手山側に在る鬼古里山から玉髓を採取するためには、まず、鬼古里山中腹から山頂にかけてのどこかで、表土(腐植土)をかなり掘り下げ、飯岡層の岩盤を見つけることが必要で、玉髓に出会うかどうかはその先の問題ということになる。

賢治が短歌にいう「かけら」とは、まずは、燧掘山の鉱山のズリ(廃石)が、大雨などによって斜面を土砂に混じり谷川に滑り落ちたものとの可能性が考えら

れる。谷川は鬼越峠から坂下の、駒形(蒼前)神社方面に、燧掘山北東山麓と鬼古里山南西山麓との谷間を流れ下っている(鬼古里山山頂は峠向こう岩手山側だが、山麓は峠を越え燧掘山側にも連なっている)。滝沢村観光課の情報によれば、この谷川には名はないとのことである。谷川の鬼古里山側の山麓(旧蒼前神社跡付近の涸沢土中)の石を採取して調べたところ、飯岡層を成す輝石安山岩を多く見つけることができた。一部の標本からは隙間に玉髓の存在を確認することもできた(写真12)。このことから明らかになったことは、鬼古里山の古相は、燧掘山と同じ飯岡層から成るという事実である。

すでに指摘したが、かつて燧掘山から採掘された燧石は、谷川沿いの峠道を盛岡城下方面に運ばれていた。ただ、当時の峠道は現在の舗装された峠道よりも山裾近くを通っていた点に注意しておかなければならない。なぜなら、谷川が、掘り出した燧石を運ぶ峠道と山裾で接しており、山から燧石をおろす作業中にズリ(廃石)が谷川に落ちた可能性も高いからである。谷川は幾筋か燧掘山側から流れ込んでいる。旧蒼前神社のあ

った鬼古里山側からの流れ込みはないようである。

賢治が燧掘山に行つた明治四十年代はすでに燧石の掘り出しは行われておらず、鉾山の掘口も草や枯れ葉に覆われていたと推定される。

燧掘山の斜面を調査してみると、現在でも玉髓のズリ（糜石）が多数腐植土の下に埋まっていることが確認できた（写真13・14・15・16）。写真13と16は、玉髓としての代表的な形のもので、別名「仏頭石」とよばれるにふさわしいものを選んだ。賢治の詩に「仏頭石」の語のあることはすでに触れた。当時の文献（帝国百科全書、八谷彪一・大築仏郎著『鉱物学全書』東京博文館、大3・2第12版）に当たつたが、仏頭石の語は見出せても仏頭石の語は確認できなかつた。おそらく仏頭石からの賢治流の造語ではないかと考える。

燧石に使うのは板状または円状に加工された玉髓である。燧石として商品になる大きさは、約四、五センチ四方の玉髓が必要であり、それ以下の石は屑として近くに捨て置かれることになる。私の探し出した玉髓のうち、大きいものはすべて質が悪く、質の良いものは二、三センチという小ささだった（写真17）。

また、谷川でも玉髓の張り付いた石を探し出すことができた（写真18）。母岩は輝石安山岩で、燧掘山側からのものと判断できる。谷川が峠道にたいし燧掘山側に流れているからである。また、この標本の場合、母岩が付随していることから、谷川の水の浸食作用によつて転がり出たものとの推定が成り立つ。燧掘山の玉髓は、輝石安山岩中に岩脈として入っており、通常、採掘者は玉髓（燧石）だけがねらいなので、周囲の岩ごと採掘し運び出すことは考えられない。

さて、小川達雄は「結局発見できたのは瑪瑙以前の玉髓のみであつた」と鬼古里山で瑪瑙の採れなかつたことに落胆しているが、瑪瑙のみならず玉髓を探すことも難しいと考える。私は燧掘山でわずかに縞模様をもつ玉髓を見つけたが、それを瑪瑙（のかけら）と呼べるかといえは大いに疑問である。（写真19）。中谷俊雄の『わたしの山旅―賢治と石と花と―』矢立出版、昭60・12）によれば、燧掘山で玉髓の他に、オパール、水晶、めのう、黄鉄鉱を採取したとのことであるが、私には確認できていない。

加藤禎一は『宮沢賢治の地的世界』（愛智出版、平

18・11)で、賢治が盛岡高等農林在学中に分担作成した『盛岡附近地質調査報文』に注目し、鬼越方面の項に、「安山岩質凝灰岩」や「半熔頁岩」の空隙に玉髄が存在する、という記述のあることを見出している。

『盛岡附近地質調査報文』は賢治の地質学的知識を知るうえで重要な資料といえるだろう。ただ、鬼越地区(特に燧掘山)で玉髄を産出するのは、輝石安山岩の空隙であり、今後、鬼越方面の岩石をさらに広範囲に調査し、賢治の記述との比較・検討する必要があると思われる。

最後に、繫温泉産出の瑪瑙についてだが、賢治が書簡で瑪瑙を採取したと記している繫温泉も飯岡層から成っており、私が繫温泉(御所ダム付近)で採取した玉髄の中には、燧掘山の玉髄に比べ、少しは瑪瑙らしい縞模様を確認できるものがあつたことを報告しておく(写真20・21)

最後に、岩手県在住の地学者照井一明氏(理学博士・県立不来方高校副校長)には岩石鑑定をはじめ地学的な見地からの多大なご教示をいただいたこと、また、盛岡賢治の会の泉澤竹男氏には現地案内・岩石採

取に関し、多大なご助力をいただいたことを、感謝の気持ちとともに書き記しておく。(了)

付記 本稿では、宮沢賢治の地学的知見の後付けを中心に論を進めたため、文学性・思想性との関連にまで内容が至ってはいない。冒頭にも記したが、基礎的な調査・考察の積み重ねが、最終的に文学性・思想性を考察するうえでの重要な役割を担うはずであり、ご理解を願いたい。

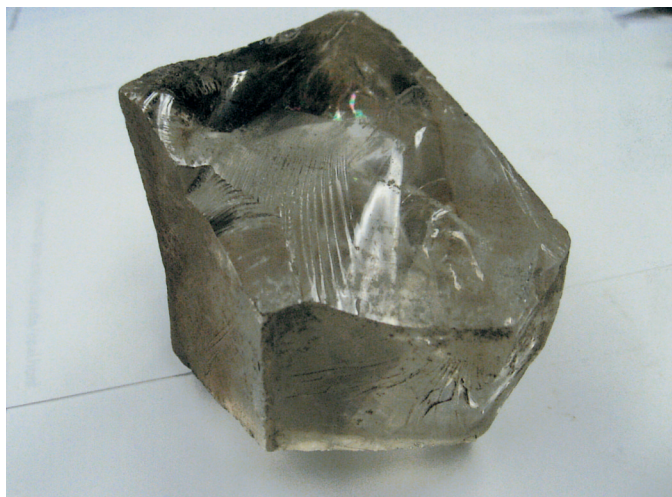


写真4 水晶（水晶堂旧蔵）幅9cm



写真5 天河石 [アマゾナイト]（金石舎旧蔵）幅4cm



写真6 木化蛋白石（金石舎旧蔵・土屋芳男氏所蔵）幅15cm



写真7 木化蛋白石（金石舎旧蔵・鈴木健司所蔵）幅15cm



写真8 安山岩（岩手山麓）幅13cm



写真9 安山岩（鬼古里山・東側・沢）幅3cm



写真10 安山岩（鬼古里山・西側・山麓下部）幅15cm



写真11 安山岩（燧掘山・東側・上部斜面）幅11cm



写真12 安山岩 [含玉髓] (鬼古里山麓・蒼前神社跡付近・酒沢) 幅7cm



写真13 玉髓 (燧掘山・東側・上部斜面) 幅6cm



写真14 玉髓（燧掘山・東側・上部斜面）幅4cm



写真15 玉髓（燧掘山・東側・上部斜面）幅5cm



写真16 玉髓（燧掘山・東側・上部斜面）幅5cm



写真17 玉髓（燧掘山・東側・上部斜面）左 幅6cm 右 幅3cm



写真18 玉髓 [母岩付] (燧掘山・東側・谷川) 幅8cm



写真19 玉髓 (燧掘山・東側・上部斜面) 幅5cm



写真20 玉髓（繫・御所ダム）幅4cm



写真21 玉髓（繫・御所ダム）幅7cm